



えど友

No. 7
平成14年
2002
5

江戸東京博物館友の会会報



平成14年度 定時総会に出席を！

5月21日(火)午後1時30分、1階ホール
～竹内館長の記念講演「下町と山の手」～

江戸東京博物館友の会は、昨年5月に発足してから早くも2年目を迎えました。振り返ってみて、この1年間の活動はいかがでしたか。

会の運営は、すべて会員の主体的な参加によって行われました。各種セミナーや体験講座、見学会の開催に加えて、館主催の企画展への特別内覧会も実施されるなど、初年度としては盛りだくさんの事業が行われ、それぞれ多くの会員の参加がありました。

第2年度も多彩な活動や事業が予定されており、皆さんの積極的な参加が待たれています。また、それらについて皆さんのご希望やご意見を、できる限り取り入れ、生かしていきたいと考えています。

総会の日程などは下記のとおりです。総会は会員の総意を結集す

る場です。議案書をお読みいただき、今後の発展のために、万障お繰り合わせのうえご出席ください。

■平成14年度総会

期日：5月21日(火)午後1時30分から
会場：江戸東京博物館1階ホール

●主な議案

- ・平成13年度活動報告
- ・平成13年度会計報告
- ・平成13年度監査報告
- ・平成14年度活動方針
- 事業部会・広報部会・総務部会
- ・平成14年度事業予算案
- ・友の会規約の一部改正案
- ・役員交代選出

■竹内館長講演、懇親会

総会に引き続き、午後3時から竹内館長の記念講演「下町と山の手」があります。また、午後5時からは懇親会が予定されています。



ハ・イ・ラ・イト

- 友の会第2年度のスタートです。新年度の平成14年度定時総会が5月21日に開催されます。引き続きご理解とご協力をお願いします。
- 会員更新の手続きをお願いします。期日までにお払ください。
- 友の会特別内覧会/講座の要旨
 - ・企画展内覧会「こどもの世界」
 - ・ちりめんおさいくもの講座
 - ・江戸手描友禅講座
 - ・企画展「利家とまつ」ガイド
- 《えど友プラザ》
 - ・テーマ特集投稿「私と江戸」(その2)
 - ・テーマ特集—投稿募集中!
- 江戸博ボランティアガイド紹介～江戸博から世界へ～
- 《事業部会だより》初年度の活動を振り返って
- 会員優待のお知らせ——「利家とまつ展」好評開催中!
- 4月から常設展観覧料が改正
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽にお寄せください。



会員更新のお知らせ



●手続きはお早めに！

友の会が第2年度に入りました。会員資格は1年間です。まもなく有効期限を迎える方は更新の手続きをお願いします。

該当の皆さんには「更新手続き書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

*更新しませんでしたと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなります。ご注意ください。

【企画展】こどもの世界

—ひな・きもの・おもちゃ—

解説: 江戸東京博物館学芸員 湯川説子、岡本純子



こどもの世界展(2/26-4/7)の開幕に先立つ2月25日、友の会の内覧会が開催されました。当日は開場前に桃の節句の甘酒とひなあられが会員に振り舞われ、午後6時から山本・友の会会長あいさつと湯川説子・岡本純子両学芸員の紹介の後、見学に入りました。展示は「こどもの祝い」「こどもの暮らし」「こどもと遊び」の章に分かれ展示物のほぼ90%が館蔵品ということでした。

雛人形では深川の下り酒問屋(関東の地酒でなく灘・伏見など上方の高級銘酒を扱う問屋)鹿島屋のもの、特に雛道具の豪華さと保存の良さは圧巻です。暮らしや遊びのテーマではいろいろな物が時代を追って並べられています。疱瘡除け、麻疹除け、薬や呪(まじない)など江戸時代の興味深い資料も展示されていました。この暮らしと遊びの部は、担当学芸員の順を追った解説を聞きながら、様々の異なった見方が出来ると思いました。

たとえば高齢者ならば、子供の時の思い出に浸るのもよし、若い人は軽工業材料の変遷とか、戦前・戦中は明治以来の富国強兵策から一連の歴史であり、敗戦後は復興と産業立国の歴史であることを、おもちゃから悟ることが出来るでしょう。軍人将棋は、子供たちに大人になったら何になりたい? と尋ねれば大抵は、陸軍大将、という答えが返って来た時代のものです。

真夏の夕べ父親達は縁台で将棋を指す。子供達もいっばしのスタイルを決め込んで、軍人将棋に興じている——。そのようなほほえましい情景

を思い浮かべてください。

多分、町の餓鬼(がき)大将が絶滅するまでは、大人と子供がまじって遊ぶのは、一年のうちでお正月だけでした。大人のゲームに子供が参加するのが、百人一首やトランプ、子供のゲームに大人が参加するのが双六、

福笑い、家族合わせ、追い羽根、コリントゲームなどでしょう。

遊び道具は、それで遊ぶ人々や遊ぶ風景を想像すると生きて来ます。「こどもと遊び」は日をあらためてもう一度見たくなる、展示でした。

【記録】広報部会・佐藤幸彦

ちりめん おさいくもの講座

講師: 内藤乃武子さん

開催日: 3月16日(土)、17日(日) 13:30~16:30

江戸時代から武家や裕福な家庭の子女の間で、やはり出した「ちりめん



おさいくもの」。今回皆さんがチャレンジした作品は、端午の節句にちなんで〈鯉を抱いた金太郎〉でした。

キットが配られると、美しい布に歓声をあげる方や、早くも針を動かす方もいて、講座は終始とても和やかな雰囲気になっていました。江戸の女性たちもきつとこんな風に楽しんでいただけたら、と思

われました。

内藤講師は、休む暇もなく教室中を回って、一人ひとりの手元を見ながら丁寧に指導されて、はじめての方もびっくりするようなすばらし



内藤講師から手づくりの指導を受ける

い作品が出来上がりました。

細かな仕上げにも時間をかけ、全員が完成したのは、終了予定時刻を超えた午後6時ころでしたが、皆さんは仕上がった金太郎人形に大満足の様子でした。楽しい気分で取材を終えました。

【記録】広報部会・岡橋園子



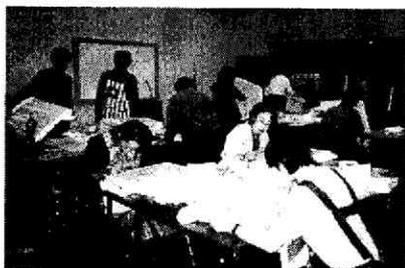
江戸手描友禅講座

講師：佐藤平八工房の皆さん

開催日：3月23日(土)、24日(日) 13:30~16:30

京都の宮崎友禅齋が創案したとされる友禅。これに江戸風の粋をこらして発展させたのが、江戸手描き友禅です。

今回は佐藤平八工房の講師陣を



迎えて、春らしい花柄のスカーフの制作でした。絹地に糊で描かれた下絵の輪郭のなかに、筆で染料をさしていきます。基本は7色ですが、混ぜ合わせることで彩りは無限。優美で華やかな色彩の世界が広がります。

先生方の指導に従って配色を考え、輪郭線からはみださないように、息をつめて筆を動かすこと3時間。参加の皆さん方は個性的で、すばらしい作品を完成させました。

【記録】広報部会・岡橋園子



ここが見どころ

【企画展】開館10周年記念

利家とまつ 加賀百万石物語

～前田家と加賀文化～

前田利家は、1538年(天文7)尾張国荒子村(現愛知県名古屋市の荒子(あらこ)城主前田利春(としはる)(利昌(としまさ))の4男として誕生しました。14歳で織田信長に仕え、その年の尾張海津(萱津(かやつ))の戦いに初陣して以降、次々と合戦で武功をあげ、32歳で前田家の家督を継ぎました。

1575年(天正3)には信長の北陸支配に伴い府中城(現福井県武生市)に入り、6年後には能登一国を任せられ小丸山(こまるやま)城(現石川県七尾市)に移りました。1583年(天正11)の賤ヶ岳(しずがたけ)の合戦後、羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)に仕え、同年、加賀国金沢城(現石川県金沢市)へ入城。越中国(現富山県)の佐々成政(ささなりまさ)を制圧した1585年(天正13)に、加賀・能登・越中3カ国支配の基礎を固めました。

その後、利家は豊臣秀吉による全国制覇の重要な担い手の一人として活躍します。五大老の一人として豊臣政権を支え、秀吉亡き後、徳川家康に唯一対抗する実力者として重きを成しましたが、政権を二分することになる関が原合戦の直前、1599年(慶長4)に62歳で亡くなりました。

利家没後、家康は前田家の家督を継いだ利長(としなが)に謀反(むほん)の嫌疑をかけ、加賀へ出兵を命じましたが、利家の妻まつ(芳春院(ほうしゅんいん))が自ら人質として江戸へ赴くことにより、前田討伐(とうぼつ)の危機は回避されました。

江戸に赴いたまつは、初め江戸城内に住まわされ、のちに大手門外の辰ノ口(たつのくち)(現千代田区大手町一丁目付近)に屋敷を与えられ、そこで人質生活を送りました。江戸での暮

らしは14年間にも及び、金沢へ帰国が許された3年後の1617年(元和3)に、71歳の生涯を金沢城で終えます。

この展覧会では、平成14年NHK大河ドラマ「利家とまつ 加賀百万石物語」と連動して、第1部では加賀百万石の基礎を築いた前田利家の人となりや、その時代背景を通して紹介します。また、第2部では前田家によって生まれ、百万石の城下で花開いた加賀文化の精華を紹介します。京都の文化との交流をしのぼせる優雅で洗練された美術工芸品の数々をお楽しみください。(『江戸博ニュース』から)



この企画展の「友の会特別内覧会」レポートは次号で紹介します。

友の会会員は観覧料が半額になります。詳細は本号8頁および『江戸博ニュース』Vol.37をご覧ください。



えど友プラザ

友の会会員のページ

テーマ特集

「私と江戸」



前号に続き、会員の皆さんからお寄せいただいたテーマ特集「私と江戸」をご紹介します。江戸って、どんなところだったのでしょうか。皆さんの果てしない思いが伝わってきます。

引き続き、テーマ特集は江戸をテーマに募集しています。また、続編に明治期、大正期なども予定しています。皆さんのお便りで交流の場にしましょう。（順不同、敬称略）

わが心のお江戸

早川ひろみ(板橋区)

「田村の家は墨田の堅川二丁目だから」が口ぐせの父も、私たち子ども4人を食べさせるために、遠い親戚を頼って台北の築地町から九州の熊本へと引き揚げてきた。子どものころ、覚えてたの九州弁を使うと、よく父に叱られたものだ。「お前たちは江戸に帰るのだから」と。

2人の叔母たちの話は、浅草の朝顔市やほうずき市に行くときのこと、「矢がすり(緋)の着物に、きんちゃく(巾着)を下げて…」と自分たちの娘時代を懐かしんでいた。「銀座の柳もいいけれど、隅田川の大きなゆったりした流れはねえー」と子ども心にも叔母たちの話に出てくる「お江戸」という言葉には憧れだった。

そんな私が縁あって21歳で結婚して上京。墨田区役所に籍を取りに行ったとき、「ああ、父の故郷に私がいる」と感激した。父たちの話とは少々異なった東京であったが、第一子を墨田賛育会病院で出産した折には、

大喜びしてくれた。

いろいろな都合で生涯を東京で終えられなかった父も叔母も今は亡く、変わりゆく東京で40余年。渋谷も銀座も良いけれど、やっぱり歩き回って落ち着くのは上野、浅草、両国あたり。私にも、父のいう「お江戸」の血が流れているのだ、と思う今日このごろです。

猿わか町よるの景

新野久美子(世田谷区)

「勝海舟って、すげえよ、やっぱ」

「は～、そうなんだ」

英雄に憧れる男というものは、女よりは、確実に歴史に強かったりする。

会話のきっかけを与えてしまうと、手品の旗が口からするすと出てきて、女子は呆然とする。学校教育は、もちろん歴史だけを教えるわけではないので、どうしても予告編のような内容になりがちで、また先生の教え方で興味を持てるかどうかとも決まってしまうところがあるだろう。変や乱なんて過ぎたこと、どうでもいい！ 将軍の名前なんて覚えてどうする！ と、歴

史にまったく興味のなかった私が友の会に入ってしまうのだから、人生わからない。

私の中にストンと入ってきたのが「江戸の庶民」。江戸時代といっても、お役人や何かを成し遂げた人ばかりであるわけがなく、当然庶民も遅く生きていたのである。庶民についての書籍を読むにつれ、オリジナルを何のこだわりもなく捨て、どこかのコピーばかりになっていく現代の日本を少しばかり憂えたりしながら、もっともっと、江戸について知りたくなった。

歴史上にチラッと出てくる庶民の姿は、貧しくネガティブなイメージばかりを私に与えていた。しかし江戸という暖簾(のれん)をきちんとくぐってみれば、低く垂れ込めた雲はどこへやら。なんてたって、彼らは元気だ。置かれたポジションの中で思いっきり楽しもうとしている。不自由さを逆手にとってさえている。「潔さ」が気持ちいい。歴史＝退屈、そんな図式は、すぐにとっばらわれた。

ある江戸の本を執筆されている方が自分の書く本の購買層は、老人がほとんどで若い人たちは興味を持ってくれない、と嘆いておられた。「知りたい」という気持ちは、原動力になる。江戸時代から続く祭り、江戸時代から

今も変わらず存在する寺院、庭園、形を変えた景色……。いろんな江戸を東京に見つけた。

気づけばまわりには、自分の親やその上の世代の人がほとんど。例えば吉良邸跡より魅惑的なのがたくさんあるのも、平成の自分にスイッチを入れるとうなずける。だから私は欲張って、今も、東京と江戸、両方を楽しんでいる。お台場の非日常的な夜景を眺めながら、黒船を心に浮かべたりしている。

読んで、聞いて、見て、触って——江戸を知るたびに浮世絵の中の彼らは、まるでアニメーションのように動き出す。

「勝海舟って、すげえよ、やっぱ」

「まあ、そうだけど私は、伊能忠敬の……」

こんなに楽しいこと、当分やめられない！！

江戸の史跡を探して！

石井麗子(新宿区)

もう20年くらい前になるでしょうか、史跡を歩いている仲間たちと「失われつつある江戸」を探して、都内とその近郊を巡り始めたのは、江戸城を歩み、忠臣蔵にゆかりの地、深川、浅草、もちろん江戸博もです。

江戸四宿は講師のお話のほかに実際に歩きました。講話は他にも「江戸よもやま咄」など、落語を聞いたこともあります。年に4、5回の開催で、もう100回近くになるのでは、と思われるこの会は、いまでも続いています。

でも、ここ10年くらい前からは「江戸」を探すのが困難になって来ており、メンバーも少しは変わったのを良いことに、以前行ったところを再訪したり、と世話役は四苦八苦。どなたか

良いところ(あるいはアイデア)をご存じでしたらお教えいただけるとうれしいです。

都市江戸と食文化

上原康子(足立区)

〈東京〉という都市は、将来展望に立った都市計画の実施の機会をいくたびか失って、現在、一種異様な、だが魅力的な、マカフシギな都市となった。

首都のありようを考えると、都市の機能・エネルギーを形成するのは都市生活者の意識に他ならない。〈東京〉という都市の形成・発展の経緯を、歴史を背景として、京・大阪という先行国内都市、および諸外国の都市の生活者の意識面から、比較文化的に研究(?)して見ることに多大の興味を抱いている。

とりあえず「近代化」を都市生活者の食生活意識の側面から、食文化的アプローチを試みつつある私にとって、「都市江戸」の「江戸」としての近代化(江戸〈時代〉化)を視野に収めることは不可欠でもある、という意味でハマっています。

江戸再発見の喜び

築地チエ子(杉並区)

江戸「えど」——この響きに心ひかれ5、6年前から数多くの江戸時代の発掘現場へ。そのうち、もっとこの時代を知りたく、早稲田大学考古学の谷川章雄先生の講義などを受け、「江戸と私」とのかかわりを深く勉強したくなった。

何度も江戸東京博物館に通って

思うことは、自然を生かした生活や近所隣りとの助け合い、小さな幸せを大切にしていた、当時の人々のその姿、その形である。日本で今いちばん欠けている姿なのではないかと……。

私にもいつも迷うことがある。そのとき、博物館の前に立つ。そのたびに、勇気と新しい発見に出会うことができ、喜びが生まれる。この心をいつまでも持ち続けて、明日のエネルギーの原点にしたいと考えている。

これからも知的好奇心を山ほど分けていただけますよう、博物館の発展とともに祈るものです。

「水の都・深川」雑感

鳥居豊彦(江東区)

「深川獺師町(*)」の説明板が永代一丁目の小公園にある。私が生まれ育った永代町は、獺師町8か町のうち深川熊井町である。この町の起源などを以前から知りたと思っていた。

私の家は、父の代で廃業したが曾祖父のときから貝類問屋を営んでいた。年貢代りに魚や貝類を幕府に献上していた獺師町とは必ずしも無縁ではなかった。

まず、江東区主催の古文書解説講座を受け、その後同好会に入り、魅力溢れる江戸の世界にのめりこんだ。幸い良い講師と先輩に恵まれ、固いアタマで学習している。文政11年(1828)の記録「地誌御調書上帳」のうち「深川熊井町」の資料も入手できて、生まれた町の様子もおぼろげながら分かってきた。

私の子供のころ、町内には同業の間屋もあり、牡蠣(カキ)や鰻(ウナギ)を捕る漁師も何軒かあったので、昔の獺師町らしさが少しは残っていた。永代一、二丁目あたりは、嘉永5年(1852)

版の本所深川絵図と比べても、地形的には現在とほとんど変わっていない。ただし、永代橋の架橋位置は下流に移っている。

江戸博友の会発足時には、竹内館長による「日本橋」への熱い思いの講演を拝聴した。「水の都・深川」でも、その象徴だった小河川や堀割が、実用性とか便利さなどのため残念ながらその多くが埋め立てられ、当然、橋も消えた。もっけの幸いというべきか私の住んでいる辺りには、大島川、大島川西支川があり、もちろん大川(隅田川)も近い。

最近、荒川では水運復活の動きもあり、隅田川河畔の遊歩道の整備、小名木川荒川口では運河開門(こうもん)の建設も進んでいる。経済優先の開発は環境悪化をもたらし、たとえ復元が可能でも莫大な資金とエネルギーが必要となる。特に河川の都市生活に与える影響の大きいことを再認識すべきだろう。

江戸時代の文化には学ぶことがたくさんある。「江戸東京博物館」が楽しく学べて、気軽に行ける博物館となるように発展を期待したい。

(*)鯉師町と表記した地名。漁師ではない。

消えゆく江戸の迷信

西 博之(品川区)

10年前に87歳で亡くなった私の母が、子どものころ(明治末年から大正の初めにかけて)を思い出し、エッセイ風の文章を書き残しました。その中にちょっと変わっている当時の迷信についての記述がありますので、ご紹介させていただきます。

◇

「私(私の母)は幼いとき、ヒキツケという病でときどき発作を起こしましたので、父母(私の祖父母)はずいぶん

苦労したようです。

当時の迷信で、井戸神様(井戸の底に宿る神)に味噌こしを半分見せ(井戸水に半分だけ映し)て『どうか〇〇のヒキツケをお治し下さい。治りました折には全部お見せします』と母が拝んでいたのを覚えています。また、四日月様にお豆腐をお供えしたのも、病を治すためでしたが、私はそのため小さいころ、お豆腐が大嫌いになってしまいました。

このように、私は小学校4年生くらいまでは体が弱くて授業も休み勝ちでしたが、5年生になったころから一日も学校を休まないようになり、すっかり健康になりました。母が丈夫になった私を連れて、井戸神様にお礼参りをし、味噌こしを全部お見せしたのはもちろんです」

◇

私も私の母も東京生まれで、戦中戦後の一時期を除いて、ほとんど東京、あるいは東京近郊で暮らしてきましたが、このような迷信を他人から聞いたことはありません。母は子どものころ、芝や麻布(いずれも現在の港区)に住んでいましたので、その周辺の迷信なのか、祖父母が千葉県木更津の出身ですので、木更津地方の迷信なのか、あるいは広く信じられていた全国的な迷信なのか、その辺はまったく分かりません。その他にも「お百度参り」とか「茶断ち」などを祖母が行っていた話をよく聞かされました。

明治維新後、文明開化の世の中になったとはいえ、まだまだ庶民レベルでは江戸時代の習慣や迷信が生活の中に根強く残り、自然の事物や現象に神が宿り、それらの神を信仰したり、頼ったり、時には恐れられたようです。

私の祖母は明治14年(1881)生れですので、江戸時代の習慣や迷信を先祖や親から引き継ぎ、その影響をかなり強く受けていたものと思われる。多分、井戸神様の迷信も江戸時

代から続いているものと思います。

私は江戸時代の庶民文化に興味があり、趣味として古文書を勉強しています。当時、盛大に行われていたという「二十六夜待ち」の行事などは古文書を通して知りましたが、庶民の家庭内で行われていた習慣や迷信などは、古文書では伝わりづらいのかもしれない。

わずか90年ほど前に信じられ、実際に行われていた習慣や迷信が、今ではほとんど誰も知らないようになってしまいました。恐らく近い将来、完全に消滅することでしょう。少し残念な気がします。もし同じようなご経験やお話をご存じの方がいらっしゃれば、ぜひ教えていただきたいと思います。

江戸図屏風と掛樋

大松驥一(文京区)

江戸博6階常設展示場の日本橋を渡って、真ん前の壁に飾られている「江戸図屏風」。寛永期(1624-44)の作品といわれ、金箔地に極彩色という華やかさで、江戸の賑わいが描かれています。

その右隻の左端に外堀(現神田川)の流れが見えます。架けられた橋は、一番上が小石川橋で、左手に小石川御門、右手には水戸屋敷(現後樂園一帯)が大きく構えています。2番目が吉祥寺橋(現水道橋)。明暦の大火で焼失する以前の吉祥寺はこの東北角にあって(現在地は文京区本駒込三丁目)、それが橋の名の由来です。

この屏風絵に出会ったときは、背筋がゾクとしたほどの大感激でした。吉祥寺橋の欄干の外に、なんと細い樋が描かれていたからです。神田上水を市中に渡した「お茶の水掛

樋」。その初期の姿がこれだという、私にとって大発見でした。



水道橋掛樋初期の姿(橋に沿った細い樋)
資料:『図説 江戸図屏風をよむ』小澤弘・丸山伸彦編、河出書房新社

日本で最初の水道・神田上水は、家康が江戸入府に先立つ天正18年(1590)に家臣の大久保主水(藤五郎忠行)に開削させたと伝えられます。水源は井の頭の弁天池。いまの神田川を流れて、文京区関口に築かれた大洗堰から素堀で水戸屋敷に入り、さらに埋樋で白山通りを南へ下り、外堀を掛樋で渡されて神田・日本橋一帯に給水されました。

掛樋とはいえば、歌川広重画の「東都名所 御茶ノ水」や江戸名所図会の挿絵「御茶ノ水 水道橋 神田上水掛樋」などで広く知られています。しかし、いずれも後世に描かれたもので、規模も構造も立派です。それらと比べると「江戸図屏風」の樋はいかにもささやかなもの。開府からまだ

20年余りの寛永期ですから市中の人口は少なく、この程度の水量で足りたのでしょう。

さて、外堀が掘られたのは元和6年(1620)のこととされますから、吉祥寺橋はその後、屏風絵が制作されるまでの間に架けられたこととなります。付属している樋は市中の人口増にもなって次第に大容量化されていき、いつの年か不明なのが口惜しいのですが、ついに「掛樋」として橋から独立したのです。

ひとつの推理としては、明暦の大火(1657)の直後ではなかったかと思われま。というのは、この火事で吉祥寺橋も焼け落ちているからで、江

戸の復興計画の一環として、市中の水需要に応えた掛樋整備が行われたのではないのでしょうか。

さらに、延宝5年(1677)5月には、「大渡樋」に架け替える工事が行われています(東京市史稿・上水篇一)。興味深いことには、松尾芭蕉(当時の号、桃青)が神田上水の改修工事に携わったのは、この延宝5年からの足掛け4年間です。資料のうえでは惣払い(上水の大掃除)のことが多く語られていますが、ひょっとすると、掛樋の工事にも参画していたのかもしれない。

江戸図屏風は想像力をかき立てて、やむことがありません。

～テーマ特集～「私と江戸」 投稿募集を継続!

テーマ特集に多くの投稿をいただきました。好評につき、引き続き募集を継続します。テーマは「私と江戸」。身の回りの江戸文化や江戸情緒、町の話、趣味や関心事、疑問質問など、「あなたと江戸」に関連した事柄をご寄稿ください。続編として明治、大正編も予定しています。

○

◆テーマ投稿要領——夏号で特集予定です。

短文(表題も)を、手紙かハガキで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切:5月末日。会員番号、〒住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。



江戸博から世界へ ボランティアガイドって、なに?

会員の皆さん、江戸博のボランティアガイドをご利用になったことがおありですか? 会員の皆さんはもとより、地方の友人、あるいは外国からのお客様をお連れして江戸東京博物館を見学される際には、ぜひ「江戸博ボランティアガイド」をご利用ください。きっと、素晴らしい思い出を持つ
家族連れにもうれしい展示案内



でお帰りいただけたと思います。

ボランティアガイド制度は、平成9年(1997)10月に活動を始めて5年目で、160名(平成13年(2001)12月現在)の方々がボランティアガイドとして活躍されています。日本語はもとより、英語、仏語、独語、ロシア語、イタリア語、スペイン語、ハンガール語、中国語で案内できる体制にありますが、曜日によって対応できる外国語が異なりますので事前に確認してください。また、予約は出来ません。

●主な活動:①日本語・外国語による常設展示ガイド②団体への施設概要、

展示の見所紹介③下見(実踏)案内一など。

●ガイド受付場所:次のボランティアガイド受付カウンター。①1階の総合案内横②6階の展示室横

●ガイド受付時間:午前10時～午後3時



はっぴ姿でガイド、山本会長

.....

会員の皆さんで、自分もやってみたい、とご希望される方は、毎年5、6月ごろに募集があります。詳しいお問い合わせは、江戸東京博物館普及係へ。☎03-3626-9974 (文)菅沼和男(写真)佐山彪

事業部会 だより

初年度の活動を振り返って ～好評だったセミナー、企画展内覧会～



友の会が発足してから早や1年。皆さまのご協力によって大過なく過ごせたことに感謝し、喜びの一言に尽きます。ありがとうございました。

この1年の事業部会活動を顧みますと、まず友の会セミナーは「大山詣での今昔」に始まって計6回開催。約300名の方が受講されました。また、見学会は「渋沢史料館」を訪ね、30名の会員が参加されています。古文書講座(入門編)は3回シリーズ。要望の高い講座だけに延べ150名以上の参加がありました。体験(創作)講座は、ちりめんの小ぎれで金太郎人形をつくった「おさいくもの」と、絹地のストールに伝統の花柄を描いた「江戸手描友禅」。いずれも

好評をいただきました。

特筆されるのは内覧会です。企画展の開催前夜、友の会会員だけが先生方の解説付きで特別に観せていただきました。「世界遺産ポンペイ展」「東京建築展」「こどもの世界展」の3回で、茶菓のサービス付きというのも新しい試みでした。

いずれの企画も多くの方々からご協力や励ましの言葉をいただき、部会員一同の力強い支えとなりました。また、江戸博普及係の皆さまにも大きなご支援をいただきました。心からお礼申し上げます。

新年度の事業は、セミナーを始め、さらに「楽しく学べる企画」を予定して

おります。ご期待ください。

まだスタートして2年目のこと、さまざまな課題もありますが、江戸東京博物館をコアにして会員一同が学び、互いに楽しいひとときを持てるよう、今後も努力して参ります。皆さまには、なお一層のご協力を賜りますようお願いいたします。(事業部会長・山口千恵子)

◆事業部会員募集◆

事業部会では、活動に参加してご協力いただける方を募集しています。新年度の事業の企画や運営などに携わっていただきます。ハガキにお名前・会員番号・〒ご住所・電話・応募事由を記入して、事務局までご応募ください。

会員優待のお知らせ

友の会会員の皆さんにお贈りする、会員ならではの特別優待サービスです。江戸東京博物館で、企画展やイベント観賞、ショッピングをお楽しみください。

【企画展】開館10周年記念

和家とまつ 加賀百万石物語 —前田家と加賀文化—

好評開催中！平成14年6月2日(日)まで
・月曜日休館、ただし、4月29日(月)～5月6日(月)は
休まず開館。5月7日(火)は休館

会員：一般450円、65歳以上220円、大専門生360円
同行者：一般720円、65歳以上360円、大専門生580円

館からのお知らせ

■常設展観覧料の改正について

平成14年(2002)4月1日から当館の観覧料が改正になりました。

●常設展観覧料(一部抜粋)

一般 600円 大学生(専修・各種含む) 480円
65歳以上の方 300円 友の会会員 無料

以下の方は常設展示観覧料が無料

・被爆者健康手帳をお持ちの方とその付き添いの方2名まで無料
・シルバーデー 毎月第3水曜日、65歳以上無料。要証明
その他の料金詳細はホームページや館案内をご覧ください。

●開館時間改正 9:30～17:30 (木・金は20:00まで)

購読無料！メールマガジン「江戸博ニュースレター」

江戸博の最新情報が電子メールで読めます。企画展案内、セミナー、ミュージアムトークなどの催し物情報、また、日々の話題や学芸員の声なども紹介。月1回発行、購読は無料。江戸博ホームページから登録申し込みください。

広報部会員を募集します。

友の会広報部会の活動にご協力いただける方を募集します。会報イラスト・レイアウト、ホームページ制作などを担当。ハガキに会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由・特技など、を記載して、事務局までご応募ください。



次号は定時総会特集号、
7月1日発行の予定です。

江戸東京博物館友の会
会報(えど友) 第7号

発行日＝平成14年(2002)5月1日

発行＝江戸東京博物館友の会事務局

130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1

Tel. 03-3626-9910

編集・制作＝友の会広報部会

発行・編集人／佐山彪(事務局長) 編集主幹／大松駿一
編集／岡橋園子、菅沼和男、佐藤幸彦 レイアウト／巻瀨彰